同　四　年（一四〇二）　ダマスカスを征す、七月アンゴラに戰ふ
永樂元　年（一四〇三）　またヂェオルヂアを征す
同　二　年（一四〇四）　サマルカンドに歸る
同　三　年（一四〇五）　支那征伐の途オトラールに死す

此の如く此の間の彼の生涯は、諸國の征伐に殆んど餘暇なき有樣である、然るに何が故に今また明とのよしみを破つて、此の上にも敵を作らふとしたのであらふか、もとより相當の事情がなければならぬ。

帖木兒の自傳と稱せらるゝツザキ、チムーリ（Tuzaki Timouri）によると、一三九六年には彼は波斯征伐からその本國に歸つて、翌一三九七年をも珍らしく其の國都にすごして居ること前表の如くであるが、こゝに甚だ重要な記事がある、即ち「當時余は異教徒と戰ふて宗教の保護者にならふと思つた、異教徒を殺す人は宗教の保護者であつて、その爲に死ぬれば神の爲に死ぬるのであるといふことは、平常から耳にして居ることである、偖て此の爲に支那（キタイ）を討つべきか、印度を征すべきかは自分で決することが出來なかつた、故に之を聖典（クルアン）に問ふて、異教徒を討つて假借する勿れとの神意に接した」と書き、また更に大會議を開いてどちらを討つべきかを諮つたことを記して居るが、その結果は見えて居ない、彼の「戰勝記」とも譯すべき、名高きザファル、ナーマ（Zafar Nāma 一四二五年にアリの編纂せしもの）によれば此の時に帖木兒は支那を征し、異教徒を殲して回教を傳播しやうと決し、その全國より兵を徵集して軍を組織したことをかいて居る、此等の記述によつて考へて見ると、彼の傅安一行の抑留せられた事情を始めて解釋することが出來る、從來西方の經略に忙殺されて居つたが、一三九六年即ち洪武二十九年に小康を得たので、終に支那征伐なる大事業を企て、丁度その前年即ち洪武二十八年に支那を發して、當時撒馬